

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立東与賀小学校
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>学力は、国語科の研究を中心に言葉を大事にする学習を進めてきたが、しかし、国や県と比較するとまだまだ改善の余地がある。</li> <li>児童が自他を大切に思う行動ができるように学校全体で取り組んでいるが、まずは自分が認められる存在であるように「ほめる」活動を今後も継続していく必要がある。</li> <li>チーム学校として児童個人の把握に努め、保護者、SSWやSC、外部機関との連携を今後も回り円滑な運用と児童の成長を促す必要がある。</li> </ul>
2 学校教育目標	ふるさとを愛し、自ら学び、ともに生きていく東よかつ子の育成 ―「元気」と「笑顔」あふれる学校―
3 本年度の重点目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>「ほめる」文化作りを行いながら、自己肯定感の醸成や自己実現を図る。</li> <li>教職員の指導のベクトルを揃えることで、学校生活や学習規律の徹底を図り、規範意識を醸成する。</li> <li>チーム学校と優先課題を意識することで、働き方改革の推進を図る。</li> </ol>

4 重点取組内容・成果指標				5 最終評価				主な担当者
(1)共通評価項目								
評価項目	重点取組	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践	学校評価アンケートを実施し、「あなたは学校の勉強がわかりますか」「勉強したことが分かったりできるようになって嬉しいですか」の項目が児童・教師ともに80%以上	・学習習慣を身に付けさせる。 ・家庭学習の充実を図るための啓発を進める。 ・つまずきの程度に応じて補充指導を実施する。	B	「勉強が分かる」「分かつと嬉しい」と肯定的に答える児童は95%を超えており、中間評価より高まっている。今後もつまずきへの補充指導を継続し、有用感の高まりを維持する。	B	アンケートの結果から主体的に学習に向かう姿勢は育っている。特に学年の児童数が少ない学年は目が行き届いている結果だと思ふ。 ・情慮面だけでなく、具体的な能力指標を定めて評価すべきではないだろうか。	学力向上部 (副)学力向上コーディネーター
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○児童の道徳的価値の自覚を深めるために、毎週の「道徳科」の充実を図る。 ○Q-Uテストにおける要支援群を10%以下に減少させる。 ○毎月「ほかぼかカード」を書く時間を設け、友達のお互いの強みを褒め合うことができるようにする。 ○人権集会を実施し、生命尊重や他者への思いやりなど、人権感覚を高める。	・各教科等との関連を意図した「道徳科」の授業を実施する。 ・Q-Uテストを年2回実施して分析を行い、学級経営の改善を図る。 ・児童の役割・出番をつくり、「ほかぼかカード」を活用することで、児童の自己肯定感を高める。 ・各学年で取り組む人権教室や全校でのほかぼか集会などを通してお互いを思いやる気持ちを育ませる。	・道徳科の年間カリキュラムや学級の実態に応じて毎週授業を行うことができた。 ・Q-Uテストにおける要支援群の人数を10%以下にすることができた。 ・異学年との交流活動後や道徳科の学習後に「ほかぼかカード」を活用したことで、80%の児童が「褒められている」と感じることができた。	B	「ほかぼかカード」の活用や異学年交流などによって、心豊かな児童として成長している。 ・引き続き場面に応じた言葉遣いについては指導をお願いしたい。 ・縦割り活動やその他の行事では、6年生の有用感を育むものにつながっている。 ・学校、家庭、地域での心の教育の温度差を埋めることが必要である。	B	道徳教育推進教員 人権・同和教育担当 (副)各学年主任
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○児童の実態把握のため、全校児童・保護者対象のアンケートを実施し、いじめ問題等の早期発見を行う。 ○アンケートを活用して、事前にいじめ防止ができた回答する職員が90%。	・いじめに関するアンケートを児童・保護者を対象に年2回実施し、実態を把握する。(6月・11月) ・「〇月のころ」を教職員間で共有し、複数の教師で指導にあたる。	A	いじめに関する調査を児童・保護者に年2回実施し、実態を把握する。「〇月のころ」を教職員で共有・指導を行ったことで、いじめ防止に向けた取り組みを進めることができた。	A	定期的に実施されている「〇月のころ」や「いじめアンケート」の取り組みが、指導に結びついている。 ・発見して〇月は経理情報というも、いじめ根絶や被害者の安心感につながっていくと考える。	生徒指導担当 (副)各学年主任
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●①「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童生徒85%以上 ●各学年の実態に応じてキャリア教育を充実させる。	・地域の方を招いてのキャリア教育講話を実施し、児童に将来の夢や目標について考える機会をもたせる。 ・各種体験活動では、児童に活動の見直しと学びの振り返りを行う活動を仕組んだり、将来の夢や目標に近づけるため学年や学期始めにキャリアパスポートを活用する。	・「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童86%。 ・生活科や総合的な学習の時間に将来の夢や目標について考える活動や自分の成長を振り返る活動を取り入れることで夢や目標を意識したり意欲をもたせたりすることができた。	B		B	「ほかぼかカード」を利用することで、相手の気持ちを知り、自らの有用感が高まることによって、ほめる習慣が身につくと思われる。
●健康・体づくり	○学校行事や遊びでたてわり活動を実施する。	○縦割り活動を充実させ、活動が楽しいと感じる児童を80%以上。	・月に2回程度たてわり遊びを実施し、異学年交流を行う。 ・学校行事を通してたてわり活動を行い、交流を深めたり、リーダーとしての意識を高めさせたりする。	A	たてわり活動で楽しく、仲良く活動している児童が91%おり、保護者の回答も97%と非常に高い結果で、たてわり活動の成果が表れて	A	・同学年同士だけでなく、異学年交流もできおり、心豊かな児童として成長していると思う。	自主自立部
	①「運動習慣の改善や定着化」 ②「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	①授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間420分以上の児童生徒60%以上 ②「生活習慣チェック表」の各項目の○が4日/7日以上の割合の児童生徒70%以上(早寝早起きできた・歯みがきをした等)	・みんな運動することの楽しさを味わい、運動への意識が向上するように、年2回の「よっこおリンピック」、スポーツチャレンジを実施する。また、昼休みに遊べるボールや縄跳びを各クラスに配布し、トラブルなく遊べるようルールを設ける。 ・保健だよりや掲示物で、望ましい生活習慣についての啓発をする。また、学級担任と養護教諭のTT授業で児童に直接保健指導を行うことで、自身の体に関心を高める。	・よっこおリンピック1・3学期に、運動会を2学期に開催することができた。外で出て運動する児童の割合は80%とあまり伸びていないので、内容の工夫などを行いながら今後も継続を図ってきたい。 ・定期的な生活習慣や病気の予防に対する啓発を行ってきた。アンケートでは、児童の82%近くが「早寝・早起き・朝ごはん」ができていないと答えている。また、歯磨きについては児童の94%が丁寧にできていると答えている。肥満度が高い学年もあるため、生活習慣については、継続的に見守っていく必要がある。	A		A	・体育の時間や休み時間には運動場で、和気あいあいとのびのび運動を行っている。教師もよく参加している。 ・定期的な生活習慣や病気の予防に対する啓発もよく行われている。家庭と連携しながら、生活習慣については継続して見守ってほしい。 ・運動への取組、生活習慣づくり、安全の意識など、日々の指導を通して定着している。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○児童生徒が交通安全に意識して登下校をすることができる。	○毎日の登下校や休日の過ごし方で、交通安全を意識している児童が90%	・交通安全教室や日々の指導等で交通安全への意識を高める。また、見守り下校を通して、児童の交通安全を意識する機会を作る。	A	・登下校の安全や交通ルールの遵守はことごとく啓発を行ってきた。アンケートの結果でもほぼ100%が守っていると答えている。自転車のマナーについては、地域からの声を反映しながら安全指導を行ってきたい。	A	・ヘルメットの着用が徹底していないように思う。「あさひさんの日」交通安全教室での指導の強化が必要である。 ・事故もなく、安全な登下校ができていた。不慮の事故もありませんので都度都度の注意喚起が必要である。	健康安全部
	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上。	・時間外勤務月45時間を常に意識するようにし、毎週金曜の定時退勤日の推進や平日の残業時間の削減を今年度も強く勧める。 ・校内LANを活用した職員会議等の時間の10%削減。	B	・時間外勤務月45時間以内は80%達成できた。育休や病休などの人員補充が不十分で、ある程度は校内で振り分けを行ったために負担増となり、時間外勤務削減は難しかった。 ・職員会議やほかの研修等もデジタル化を推進することで、データの裏取りで済み、改善を図ることができた。 ・年次取得は1人平均11.5日であった。	B	・教師の育休や病休等で人員補充が出来ず、時間外勤務は致し方ない状況であった。目に見える業務改善等は行っているが、根本的な業務改善・働き方改革には厳しい状況でもある。 ・今後もできるだけデジタル化を推進してもらいたい。	管理職
●特別支援教育の充実	○学校業務改善の推進	○管理職だけでなく学校全体で業務の改善を図るための話し合いを月1回行い、スリム化を実施する。	・主任会を月1回開催し、その中で学校全体行事だけでなく学年ごとの行事の精選を行い負担軽減を図る。	A	・学年主任会を開催することで、学校の現状を共有化し、改善策を講じることができた。意思統一を図ることでチームとして対処することができ、結果として業務改善につながった。	A	・チームを意図して情報交換を頻繁に行いながらの指導は好ましい。教科担任制や交換授業も効率化につながっている。	管理職
	○個に応じた支援体制の確立	○個々の児童に応じた支援を行うために、全職員との共通理解を図る情報交換の場を月に1回設ける。 ○学校生活支援員との連携を深めるために、児童の記録ファイル毎週末、各担任・コーディネーター・管理職で回覧する。	・配慮を要する児童について、教育支援計画や個別の指導計画を作成し、年2回見直し活用する。 ・必要に応じて支援会議を開催し、適切な対応を協議し全職員で支援していくと共に、外部機関との連携を図る。	A	・配慮を要する児童について、教育支援計画や指導計画を作成し、実態を踏まえた目標や支援方法を検討し、継続的に記録して支援方法の見直しを行うと共に、情報を全職員で共有しながら支援を行った。 ・必要に応じて、外部機関との連携を図り、支援会議等を実施し、より有効な支援方法を探った。	A	・職員間、外部関係機関との連携のおかげで、子どもたちも安心して学校生活が送れている。今後も子どもたちや家庭に寄り添った支援をお願いしたい。 ・特支在籍児童の交流学習における居場所づくりの手厚さがあったように思う。	特別支援コーディネーター
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目								主な担当者
評価項目	重点取組	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○教職員の資質向上	○校内研を中心とした教職員の資質向上	○教職員へ向けての意識調査で、肯定的な回答を70%以上	・学習課題の立て方や、言語活動を貫く学習の方法を探り、積極的に取り入れたものを実際に授業に取り入れ、授業公開を行っている。 ・各学年の発達段階に応じて地域の特色ある伝統文化や特産物と触れる学習を進める。	A	中間評価に引き続き、教職員への意識調査で、肯定的な回答が95%を超えているため、今後も、言語活動を通して、教師や児童が「学びが楽しい」と感じる授業づくりに取り組む必要がある。	A	すべての教職員が学年間の研修を超えて、都度、研・連・研を密にし、自己研鑽も併せて資質の向上に努めている。 ・今後も子どもたちが「学びが楽しい」と感じられるよう専門性の向上を期待したいが、学びの楽しさを感じる授業とはいかなるものか、具体的な児童の姿で、どう捉え、評価していくかが分らばいい。	
○地域連携	○ふるさとを愛し自ら学び、ともに生きていく東よかつ子の育成のために地域との連携を図る。	○どの学年でも地域との関わりをもつ内容を盛り込んだ授業づくりを行い、地域との関係性を深めながらふるさとを愛し、誇りに思う児童の育成を図る。		A	・各学年共に東与賀の特色ある伝統や特産物と触れることができた。米作りや味噌作りでは、広域ネットワークと連携しながら活動を進めることができた。今後も、学校で系統的に取り組めるように整備していきたい。	A	・各学年相応の学習内容に応じて、地域人材の活用ができていた。町内の例に参加することも、町民の人としての有用感の醸成につながっているのではないだろうか。 ・東与賀町ならではの体験、米や味噌作りは地域との連携の面からも必要である。	地域連携指導教諭
●…県共通 ○…学校独自 ○…志と誇りを高める教育	<p>・学力は、国語科の研究を中心に言葉を大事にする学習を進めてきた。その成果として国語の学習が楽しいと回答する児童が95%に達している。しかしCRTの結果を見ても底上げがどの学年もできていない。 「学ぶことの楽しさ」を感じさせるのは大事なことであり、「楽しさ」を授業の中でどのように具現化し、共通認識をもって授業づくりをしていく必要がある。</p> <p>・自分が認められる存在であるように、「ほめる」活動を来年度も「ほかぼかカード」の取組などを中心に継続していく必要がある。また、「たてわり遊び」よっこおリンピックなどの他者との交流を通して自己肯定感を高めることを中心に学校全体で取り組みの継続を図る。</p> <p>・特別支援教育の充実が本校の課題である。チーム学校として児童個人の把握に努め、保護者、SSWやSC、外部機関との連携を今後も回り円滑な運用と児童の成長を促していきたい。また、通常学級にも困り感を持っている児童が数多く存在するので、保護者と密な情報交換を行い、改善を図ってきたい。</p>							
5 総合評価・次年度への展望								